

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第四十七号 (二〇一〇年四月)

風に吹かれて (10 04)

白井啓治

『梅一輪の香に夜を偷まれて』

今年の冬は実に落ち着きのない天候であった。乱高下する気温に体がついて行けず、何年振りかの風邪まで引いてしまう有様だった。しかし、庭の梅の花は、桃の花かと同じくらいに豊満な姿を現してくれた。

梅の花が豊満だなんて表現をした記憶はなく、実際あまりピンとこない。だが、豊満で妖艶とした表現のしようのない風姿であった。その梅の蕾が見事に膨らんで来た時、一枝手折り、白い花びんに投げ入れたら、その夜一輪がひっそりとはなく、これも想像し難いかも知れないが独り寝の間にピンクのうす灯りを点すだけでなく、梅香が寝部屋を独占してしまったのである。

梅香の間の隙間に静と零れて来て、なんてことを言いたいのであるが、「わ〜い！ 梅だぞ〜ッ！」と大はしゃぎされたのである。まさしく夜を偷まれてしまったのであった。

三月は、桃の花と見紛うほどの梅の花が、悲しい知らせをも運んできた。三月に入って間もなくの時、6月公演の台本を書くための取材に、村上

龍神山に登って来た。急傾斜の山に数百年を超す古木が鬱蒼と覆い、天空からの光を殺している。すでに道とは言えぬ道を登り、頂上付近の岩に建つ小さな祠を見て来た。

祠の祀られた大岩の所からは、常世の国が一望に見わたせ、素晴らしいところであった。しかし、その足元を見ると、雄山、雌山と連なる峰が分断され、もう二度と再び夫婦龍として手を取り合うことは無くなっている。実に悲しく、淋しい思いにさせられた。

山を降りながら、6月公演はことば座の第二ステージの初回なので、龍神山の無常を池田さんの居合の剣舞とコラボレーションでやってみるのも良いなと思ったのであったが、その二、三日後、池田さんが亡くなられたとの知らせを受けたのだった。

池田兄は、私が石岡に来て最初に声をかけて頂いた方で、お店の前を通るたび、寄ってお茶でもどうぞ、とお誘い頂いた。池田兄が、居合道で日本一にいられた事を知ったのはずいぶん後になってからの事であった。

居合の達人である事を知って、一度小林幸枝の舞とコラボレーションしてみたいものと、お話ししたら、快く承諾して頂いた。最初で最後になってしまったが、池田兄の剣舞とコラボレーション

した話は、石岡の伝説、鈴姫の物語であった。新説として再構築した物語のテーマにしている身勝手な自身を滅ぼす、に呼応して姑息を打ち首にする、の設定で演じて頂いた。

村上龍神山の山を降りながら、池田兄の顔が浮かび、小林さんに6月は池田さんにお願ひしてもう一度コラボレーションしようか、と話したのであったが、その日は池田兄の召された日でもあった。最後まで不思議な御縁であった。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費として)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

龍に恋した女に

小林幸枝

三月の下旬、六月公演の台本を書くための取材に、村上佐志能神社のある村上龍神山に脚本家に同行し、登って来ました。頂上近くに、小さな御社が祀られてあるとの事だったので、是非見てみたかった。

龍神山はもともとは村上山と呼ばれていたのだそう、何時頃から龍神山と呼ばれるようになったのかはハッキリ分からないようです。

村上龍神山は、樹齢数百年以上の古木に覆われ、山全体が幻想的な雰囲気にもまれていた。今では訪れる人も殆どないらしく、道らしい道も無かった。龍神山の社というと、染谷佐志能神社を思ってしまうのですが、村上佐志能神社の方が古く昔は村上神社と呼ばれていたそうです。

急斜面を這うようにして、ようやく頂上にたどり着いたのでしたが、頂上にあるという祠が見つかりません。しかし、頂上から眺める風景は素晴らしいものでした。所が、絶景だったのは水戸の方角に目を向けている時だけで、筑波山、土浦方面に目を向けると、突然に山が無くなり、削られた岩肌が寒々しく、尾根伝いに隣りの染谷龍神に行く事を拒否されてしまいます。

龍神の雄山、雌山が手をつなぐ事が出来ない様に、削られ、切り離されているのです。それは、とても悲しい姿でした。山頂の大岩に小さな祠があるというのは昔の事かな、と思いつながら、山を降り始めると、削られて垂直の崖になっている少し手前の岩のところに、本当に小さな祠を発見することが出来ました。

コンクリート製に造り変えられてはいましたが、

石岡市内を見下ろすように鎮座していました。かしわ手を打ち拝礼すると、小さな祠が私に話しかけてくれている様な気持ちにさせられた。

『母にこの国を守る龍になれと言われ、この山の底に、千数百年の間、龍となって天に昇る日を待ち、氣力を高めて来たのだが、龍神になる事はもう叶わなくなってしまう。しかし、今ここで舞姫のお前に逢ったのは神のおぼし召しである。私の天に昇る姿を舞いに見せてくれ』

私はそう言われているように思った。

朗読舞の詩の中に「舞い人」というのがあります。そこには、「私に風をください。私に移ろう時をください。私に暮らしを紡ぐ恋をください。私は舞い人。私にはあなたの愛をもらって、このふる里に夢を舞いましょう。希望を舞いましょう。私は舞い人。」と詠われていますが、その詩の言葉が思い浮かび、祠に向かっ、ふる里の夢、希望を必ず舞います、と応えてしまいました。

山を降りる時、第二ステージの第一弾で、龍神山をモチーフにするのだから、また池田さんの剣舞とコラボレーションを考えても良いね、と脚本家に言われた。

ところが、二、三日後に「池田さんが亡くなられた」という連絡をもらい、ビックリした。池田さんが亡くなられた日に、私達は村上の龍神山に登ったようです。もしかしたら頂上の岩に鎮座していた祠の声は、池田さんが「幸枝さん、ふる里を美しく舞って下さいね」という言葉だったのかな、と思います。ここに改めて池田様の御冥福をお祈りいたします。

村上佐志能神社には、古代より滾々と湧き出している池がありますが、龍神山が半分削られてし

まったせいなのだろうか、今では細々とした湧き水しかなく、溜まり水も静謐なものではなくなっています。今にも枯れそうな池を見ながら、ふとこんな話を創造してしまつた。

昔、この池を大切に守り、毎日周りをきれいに掃除したりする女性がいました。雨が全く降らない旱魃の年の事でした。この池の水を独り占めして儲けようとたくらむ悪者が来て、水守りをする女性を殺してしまいました。すると草むらから虻が何匹も現れ、悪者をやつつけてしまいました。

この虻は、龍に任せ、生きものの皆に平等に水を分け与える役目を任されていたのでした。悪者に殺された女性の魂は、龍の眠る地中に召されたのだそうです。今でも、池の下の湿地には虻が水を守っているそうです。

さて、そろそろ6月公演の台本が書き上がってきます。どんな恋物語になるか楽しみです。6月公演は、池田さんの追悼公演として、龍に恋した女として、夢と希望のある舞を創造したいと思えます。

古代エジプト文明の風に吹かれて(1)

兼平ちえい

三月八日、羽田空港十四時二十五分発。

気がつくとき雲の上からの眼下は雪に覆われた中国大陸が悠悠と広がっていた。見下す日没に歓声をあげながら日本食の夕食を満喫。いつしか浅い眠りに就く。

カイロの地に降り立ったのは三月八日、暗闇の

二十二時過ぎた頃だった。一路ホテルへ。

古代エジプト文明は、アフリカ大陸の北東部分を南北に流れる、ナイル川流域に発達した文明で、メソポタミア、インダス、黄河とともに世界四大文明の一つである。

古代ギリシャの歴史家、ヘロドトスは「エジプトはナイルの賜物」と著書「歴史」に記述している。

九日朝、「生野菜やフルーツ、氷等の熱処理されていない食べ物、食べ過ぎると体調を崩す原因」との注意をしつかりと頭に入れる。

七時十五分、バス出発。カイロ駅から一つ南下したギザ地区へ向かう。

車窓から見るカイロの街は道路も含め、いたる所にゴミの山が。その多さに驚く。市内を潤うはずのナイル川の両岸に無造作に捨て置かれたゴミ、ゴミ。市民は足元のゴミを一向に気にしない。ナイル川がゴミの埋め立て地になってしまつのではないだろうか。

間もなく車窓から、三角帽のピラミッドが出現。だんだん迫ってくる。

ナイル川岸の石灰岩の層の広がる台地上に硬い岩盤に支えられ、四千五百年以上もの間、クフ王（BC 2604～2581）、その子カフラー王（BC 2571～2546）、その子メンカウラー王（BC 2539～2511）と、それぞれの建立の三大ピラミッドは、ライオンの体に人間の頭を持つ、スフィンクス像と共に、エジプトの歴史を守り続けていた。

「うあ。人間が蟻のようだ。いやそれ以下……」である。近づくと一つの石が一人の人間の高さと同じ位。これが四千年余り前の人間の成した技。

凄い。

ピラミッドは一体何の為に造られたのか。今もなお謎に包まれ、決定的な証拠はなく、今後の新たな発見と研究に期待がかかっているという。アジア初の早大エジプト調査隊の吉村作治教授は二十世紀初頭にメンデルスゾーンが考えた「農閑期の農民に仕事を与えるための公共事業だった」という説に同感を示している。

エジプト内の数あるスフィンクス像の中で目の前にあるギザのスフィンクスは長さ57m、高さ20mで世界最大である。長い間、砂に埋もれていたが、新王国第一八王朝、トトメス四世によって掘り出された。一つの岩山を彫って出来ているというから驚きであった。カフラー王の守護神という説もあるが太陽神として信仰の対象とされていた。

1798年、ナポレオンはエジプト侵攻の際ピラミッドを指して「兵士諸君、四千年の歴史が君たちを見下ろしている」と訓示を垂れ士気を高めたとという逸話があり、遠征には調査団を同行させ、ロゼッタ・ストーンの見見などでヒエログリフを紀元前3000年頃に誕生したと言われる古代エジプトの絵文字）を解明するきっかけとなりエジプト研究に大きく貢献したという。

ギザより更に南下。古代エジプト最初の首都メンフィスには、新王国時代に絶大なる権力を誇ったラムセス二世（90年という長い人生、最愛の妻ネフェルタリをはじめ、王妃7人と100人を超す子供達に囲まれていた）がプタハ神殿の入口に建立した巨像が地震によって足首から下の部分が破損したため現在は横たわるように保存されていた。

左足の後にラムセス二世を支える繊細な女性の

手が描かれていた。

そして、サツカラは古代エジプトの首都メンフィスのネクロポリスすなわち、死者を葬るための「死者の町」だった。そこで世界最古の階段ピラミッド（エジプト初のピラミッドを建てたジェセル王、在位BC 2667～2648）に出会う。ここには直方体の形をした墳墓、マスタバ墳も見られた。

サツカラから南へ約4km下った砂漠地帯ダハジュールには古王国時代第4王朝、スネフェル王ギザの大ピラミッド建立のクフ王の父BC 2613～2589）が建立した赤みを帯びた傾斜角度のゆるたりした赤ピラミッド、同じくスネフェル王建立の、途中から傾斜角度が変わる屈折ピラミッド、そして日干しレンガと玄武岩で造られた為、黒く見える黒ピラミッド（中王国時代第12王朝、アメンエムハト3世建立、在位BC 1842～1797）がそれぞれに世界遺産として誇らしく、雄雄と静寂な砂漠にそびえていた。

とてつもない広大な砂漠の台地に立ち、四千五百年前の古代エジプト人の英知と技術と芸術を見上げる。

現在のエジプトの季節は真冬というのに灼熱の太陽と砂を含んだ風から脅威という感動を頂いた。神秘のエジプト周遊八日間の旅の後半は、来月号でお伝えしたいと思います。

・後の世にも生きるツタンカーメン
・そおくと春 ちゃんと春

ちえこ

さて本月は、何を書こうかと迷っていたら、どうも先月号の「人間の本性」が、頭にこびり着いて離れない。長い歴史を戦に明け暮れた人類。なぜ人類は、これほどまでに好戦的な動物なのか？なぜもつと穏やかな生物に進化できなかったのか？ 難問であるが、本月はこの点にフォーカスを絞っていきたい。

大げさなテーマを掲げた方がいいが、先月号で、一体何を言い切ったか？ 人間の深部にどこまで切り込めたか？ プロの哲学者ではないのだから、突っ込み不足は否めないが、重大な部分が欠落していたので、今月号で補充したい。何しろ、にわか仕立てのスピーカーゆえ、論理構成も起承転結もありはしない。思いつくまま、日頃、頭にある事を、わずか一月間の熟成期間で纏め上げるのだから、かなり乱暴な話ではある。

人間の本質的な面については、文豪とか、評論家とか、人間の素晴らしさを讃え、今日の文明を築いた人間の創造力を称賛する。確かに、芸術、文学、絵画彫刻、建築、科学など、戦争ばかりしている愚かな人類にも、こんな素晴らしい一面があるんだ。と私も、本当は拍手を送りたい。

またスポーツでも、バンクーバーオリンピックでの浅田真央ちゃんの華麗なる舞など見とれて、しばし時を忘れ、陶醉してしまう。カーリング娘の集中しているあの「眼」の魅力。ダ・ヴィンチも歌麿も到底描けないだろう。残像として私の目に焼き付いて、いつまでも消えない。

そして音楽の世界では、歴史上、どんな偉大な作曲家・演奏家がいるか知らないが、私にとって、

行方市にお住まいの野口喜広さんのオカリナ曲集「土はふるさと」は、本当に私の心を癒してくれ。実は私は、疾(と)うに両親を亡くし、最近、心の支えであった実兄を亡くした。兄は、自然を心から敬い、農業の傍ら、彫刻・書道・歌道を愛し、吟遊詩人さながらであった。決して出しゃばらない。謙虚を旨とし、友と酒酌み交わし、いつも静かに笑顔の絶えなかった兄。その兄を亡くし、私は今、すっかり落ち込んでいます。私を産み育ててくれた「ふるさと」は、豊かな自然に囲まれ、厚い人情で埋め尽くされている。その兄を亡くしたことで、ふるさと喪失感が非常に強い。

私の心の故郷は空洞と化した。そんな折、野口さんのオカリナのCDを得ることができ、私の心から消えゆくふるさとに、再び想いを呼び起させてくれた。あの素朴な音色は、ホテルや村祭りをしじみ思い起こさせ、私を元気づけてくれた。誌上を借りて心から御礼申し上げます。

さて、人が故郷を恋しく思う心は、誰でも、この世知辛い憂き世をのがれ、この世で一番安全な場所、大きく包み込んでくれる居心地の良い場所、即ち「親のふところ」の中に戻りたい。という帰巣本能なのである。すべての動物にある基本的な本能なのである。故郷を離れ、この石岡に来てジャスト50年。一日として故郷を忘れた事はない。子育てや、仕事の多忙さで薄れがちのことは多々あったが、ふるさとあつての今日の自分という、観念を薄めたことはない。

更に、有袋類を見ると、子はかなり大きくなってからでも、すぐ母の育児嚢に潜り込もうとする。親こそ安全の保証。それが故郷を恋つる心理の原点なのである。生存競争の激しい世にあつて、

自分が今日まで生きてこられたということは、少なくとも幼少時代、皆が護ってくれたふるさと時代が、安全であったという証拠である。そこへ、
* * * * *

さて本論 人間活動の美しい面のみを拾い集めれば、それは盛り沢山にある。しかし世の中は、そんな綺麗ごとのみでは済まされない。一転、人類の歴史を振り返ってみれば、史実として、目を背けたくなるような、残酷な面が多々あった。

今から7万年前、アフリカを飛び立ち、アラビア半島に進出したわずか150人ほどの、言わば親戚同士のような黒人の群れ。それが現生人類の全ての祖先だ。一部は再びアフリカに引き返し、そのままニグロイドとして今日に至った。一部はアラビア半島から東に進み、アジア方面へ放散し、モンゴロイドとなった。そして極東の果てまで、遙かなる旅路を重ね、辿り着いたのが、我々日本人の祖先達である。そして残りの一部はヨーロッパ方面へ北進して、コーカソイド(白人)となった。現在67億人の全人類は、元を糾せば、みな親戚同然の仲間達であった。

それが、住みついた場所の緯度により、紫外線の量が違い、メラニン色素に濃淡を生じた。その結果、北方に住んだ白人は有色人種を蔑み、奴隷狩りするなど、非人道的な残虐行為を繰り返した。更に南北アメリカ大陸で、コロンブス以降の白人供が、穏やかに暮らしていたモンゴロイド先住民(インディアン・インディオ)9000万人の90%を殺害した。

そして肌の色による人種差別だけでなく、同じ色でも、隣国同士や、或いは近隣同士でも狭い

縄張り根性で多くの争いを繰り返してきた。

もし白人同士なら、広島・長崎に原爆投下はしなかったであろう。このように、ヒトは、野生時代の縄張り争いさながらの根性で、敵対行為を繰り返す。悲しむべき性(さが)である。

本会報でおなじみの打田先生の記載にもあるように、西アジアから南ヨーロッパ、更にアフリカ北部にかけて、ペルシャ・オスマン・ギリシャ・エジプトなど何か国も絡み合い、何百年にもわたる戦いは絶えず、帝国の興亡は目まぐるしい変転をとげた。中国本土でも幾多の国家が興亡し、更に極東地区では、朝鮮半島など、中国と日本の両方に挟まれ、幾度も辛酸をなめてきた。その裏返しに、今日、スポーツナショナリズムに繋がりが、野球・サッカーなど、正に根性の塊で、何が何でも、日本にだけは負けてたまるかという意気込みがありありと見える。

そのような争いの根源を、私は独善と偏見かもしれないが、人間の持つ野生時代からの飢えに対する縄張り確保というか、より良い獵場・漁場の確保というか、先陣を競い合う…生存根拠確保のための「場所取り」と考える。そのノウハウが、人体60兆個の各細胞の中で、長さ180cmのDNA螺旋の中に、しっかりと刻み込まれている。それ故、人類が1万年やそこらの文明という、薄い着物を着たぐらいでは、中身がスケスケで、本体・本性が明瞭に透けて見えてくる。

大層なことを調子ぶって、縷々述べたが、古今東西、聖人・賢人が、人類の根源的な本性を「性善説」とかで美化した。更に一族のリーダーを、天孫降臨とかいつて神格化し、醜い争いことに明け暮れる人類を、国土統一などの目的で、神が

かつた崇高なものとして崇め奉った。

いたる所の神社に祀られた神々は、殆どは戦の神様で、〇〇の命(みこと)などと称され、戦争の勝利を祈願するために後世作り上げた偶像なのである。不謹慎とお叱りを受けるかもしれないが、古代、戦に功績のあった人物は、所詮 剛腕・強欲で、知略・謀略に長け、地方豪族のような小国の首領みたいなものであつたらう。仲間達も逆らえば仕打ちが怖い。むしろ尻尾を振ってなびき、英雄・軍神・帝王として崇め奉った方が、遼友・重臣として厚遇される。未代まで子孫は安寧が得られる。そのようにして担ぎあげられた首領は、いつの間にか、時代が過ぎれば「神」として美化され、社などに祀られたに相違ない。いわゆる「首長霊信仰」として根付いた。

そもそも古代の戦争は、縄張り争いが始まりで、生命維持のための食糧確保が主眼であつたはず。食糧や宝物・道具などの略奪・強奪。そして女を奪い、男は殺されるか、奴隷として連行される。こうして強欲なものは、国土を広げていったに違いない。そして時代が過ぎれば、略奪主の首領は、神格化し英雄として祀られる。〇〇の尊(みこと)として、神話の世界に収まる。

従つて、神話時代、いかようにも偶像化され、神格化され、シャーマンにより、神のお告げとして、死後までもこの世に君臨する古代の神々。煎じつめて考えれば、生存のために奪い合う野生動物の行動と、決定的に違うところはなにもない。生きるために奪い合うのが生き物の本性だと言いたい。奪い合いは、あまり美しくはないが、決して醜いものでもない。冒頭で、人類の表面的な美しさに拍手を送りたいが…と云つて口ごもつた

理由はそこにある。

話を、人類が歩んできた基本に戻そう。

人間行動の殆どは、ライバルを退け、己が生存に有利になるよう全霊を傾ける。前号と重複するが、人類は長い野生時代、他の集団と縄張りを争い、熱帯アフリカで発祥した関係上、強力な肉食獣という天敵に常に取り囲まれ、正に食うか食われるかの時代を700万年も過ごしてきた。一瞬の隙は、落命につながる。

そして日頃の生活は、常時「飢えとの戦い」であり、百獣の王ライオンでさえ、狩の成功率5%とも言われる。その隙間に、さほど敏捷でもない人類が、どうやって獲物を確保するか。横取り専門のハイエナなどもウヨウヨ。

人類は雑食動物である。土中のイモ類とて、鼻のいいイノシシなどに先にやられる。樹上の果実の収穫は、立体行動する鳥や猿には敵わない。食べられそうな植物は、無数の草食獣との競合だ。そういう中での狩猟採集は、いかほど苦難の積み重ねであつたか? そうした何百万年も積み重ねた行動パターンが、即ち現生人類の根本を形作る「本性」ということになる。襲い来る飢餓や天敵の恐怖など、DNAに深く刻み込まれた記録、それが即ち人間の本性を形作る基本となつた。

【殺人など、人類の激しい攻撃性は、恐らく、アフリカで何百万年間も、恐ろしい肉食獣の天敵に脅威を感じ、殺される前に自分や家族を守るため正当防衛的に、先制攻撃を加える。その長年の習慣が自然と身に付いたものなのであろう。】

それ故、常に餓えた状態が続けば、たまに大物の狩が成功し、豊富な食料にありつけば、これ幸いと、食べられる時に存分に食べ込む。これが野

生の基本的な習性であったはず。

従って、今日、食糧が豊かになっても、飢餓に備えて、あえて皮下脂肪を蓄積する必要がなくなっても、子を栄養豊富に育てるために、まず脂肪を蓄積しようとする生理的本能行動が強く働く。冬眠前の熊と同じ。何百万年も蓄積した飢餓の経験が、強い食欲としてDNAにしっかりと刻印されている。人体の各細胞の機能は飢餓対応の形で、恒久的プロテオーム化がなされている。メスは長期妊娠・育児のために皮下脂肪として、オスは闘争の瞬発力のために、内臓脂肪として、懸命に脂肪を蓄えようとする。

それが今日のように、何を血迷ったか、瘦身が美しいなどという、とんでもない考えは生存原理に反する。女性が細身を売りにする理由は、「わたしは、見ての通り、妊娠していませんよ！」と、男性を誘惑する野生時代からの深層心理が根本に働いているからだろう。野生のオスから見たら、母の枕詞「垂乳根の」と云う通り、皮下脂肪たっぷりの豊かな乳房こそ、我が子を栄養豊かに確実に育ててくれるに相違ない。という深層心理が働き、未来に対する安心契約のような感覚で、プロポーズしたに相違ない。

【人類は体毛を脱ぎ捨て、体表に汗腺を発達させた。そのおかげで野生動物に比べ瞬発力は劣るものの、獲物を追っての長距離走は、発汗で体温上昇を抑えることができるようになった。一方、動物の方は、追われて逃げ回ると、汗をかけないため、体温上昇で先にダウンする。人類は思ったよりも、大物の狩に成功することができた。そうして栄養豊かになり、40万年前から火の使用で、消化が改善されると、大脳はますます発展する。

グルメが大脳を肥大化させたと言われる。そして道具を改良し、言語の発達により、連携した狩が行われ、集団の生存能力が一層向上していった。】

人体の各細胞には、何百万年の飢餓の記憶が、しっかりとDNAに刻み込まれている。いかなる悪条件をも乗り越えて、まず個体の生存確保、そして繁殖のために全力投球するように、頑なにプロテオーム化されている。食欲と性欲は基本本能だ。

それ故、今時、つまらない美意識で、生存原理に反するダイエットなど、簡単にできるわけがない。ダイエット至上主義は、商業主義の策略にすぎない。医学的にも瘦身は肥満と同等の危険性がある。20歳の娘が90歳と同じような骨をしている例もある。正にダイエットなど神の意志に背く反逆行為だ。それ故、野生時代なら、人類のオスは、豊かな乳房こそ、確実に我が子を育ててくれるに違いないと本能が判断し、「婚活」を進めたことだろう。それが生存原理だ。祖先が残した厳しい環境に生き抜くための処方箋、それが現在の我々のDNAの中にとしっかりと組み込まれている。組み込まれたDNAの記録、それが本性だ。

今、文明のおかげで、かなり豊かな環境が得られたとしても、それはオブラートのような薄いもの。何百万年の飢餓・天敵対応が本命だ。

本能は、想像もできないほど、どす黒く重厚なもの。本能は生命活動の基本である。それが基本だからこそ、目を背けなくなるような凶悪事件が、世界の各地に、毎日のように発生する。恐らく今更、人類は、凶暴性を骨抜きしたような、穏やかな羊の群れに変転することはないだろう。悲しいかな相争う姿勢が、人類の本性だ。

飢餓が、いかほど苦しいことか、それを歴史は

証明している。BBC放送の「地球伝説」を見た。エジプト文明がなぜ滅亡したか？ それはナイルの水量が減り、食糧生産が激減し、肥大化した人口を養えない。極限状態でやむなく、人間が子供を殺して食べた痕跡が発掘されたのである。傷痕のある子供の骨が、一部炭化して埋まっていた。同じことがマヤ遺跡からも発掘されている。

人間行動（本性）の基本的な原理は、長い野生時代に苦しんだ飢餓・天敵対応が、その根本に存在すると考える。代謝と繁殖、それが生き物の生存原理であり、それを全うする習性が「本性」だ。

*訂正 先月号で、現在の世界人口67億人と書くべきところを86億人（30年後の推定値）と書きました。お詫びして訂正します。

ギター文化館

2010 CONCERT SERIES

今年はギター文化館が開設して18年になります。今年も魅力いっぱいのコンサート・シリーズを予定しております。御期待下さい。

- 4月4日(日) PM3:00~李波 馬頭琴リサイタル
- 4月11日(日) PM1:00~小原聖子コンサートとマスタークラス
- 4月25日(日) PM3:00~荘村清志ギターリサイタル
- 5月16日(日) PM3:00~國松竜次ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

独り善がりだったかな

伊東弓子

此の頃物忘れが多くなった様に思う。名前、地名が出てこない、横文字の言葉が覚えにくい、話しが理解しにくいなど気になっている。

先日「玉里御留川」の資料も印刷の為の作業に入った時だった。文章の校正をしていた時「直段」という文字が出て来た。これは「イ偏」が付いたか、これでいいのかと迷った。リーダーにきくと「直」この字で間違いない、古文書にはよく出てくる字であると言われ、そこで前にも聞いた事を思い出した。辞書を引いたかという問いに手持ちの辞書で引いたがよく分からない事を伝えた。リーダーは電子辞書を開いて「広辞苑」の中の解説を見せてくれた。私がカバンの中に入れてある物はちやちやなんだと。辞書の所為にした。覚えていないという事は年齢の所為かなとも思った。一寸見てみなという言葉に電子辞書に目をやると、その字から沢山の言葉が紹介されていた。本を読む習慣がついていけば分かる筈よ。の響きに一寸悲しかった。でも本当の事だ。私にはそれが一番欠乏している所だ。本を読むことをしてこなかったから、頭の中に蓄積された物が無いのだろう。仕事をしている時も理論的に説明することが苦手で私の背中を見てついてきてという無理な要求をしてきた。グループ活動の中でも基本的な事に力を入れず、周りで勝手に蠢いている存在を選んでいった。欲も無く努力もせずにやってきていた。そういう姿勢が今回諸に現れ、皆でやる事に支障を来たした。でも急には向上しないから私の出来る事をしよう和我武者羅に始めようとしたが、自転車では間に合わないか。「玉里御留川」を取巻く地域

に漏れなく知らせるのは無理か中半諦めかけた時「ここまで来たんだから気が済むようにやった方がいいよ」

と言ってくれた。それは妹だった。力強いアツシーさんとの出発が始まった。

高崎、高浜は知っている人が多いので、説明しやすいうように内容をつかんで、順序よくすすめている。自分が熱くなって話しているのを感じた。

羽成子から先は知っている人がいない。余程勇気を出して尋ねなければと覚悟した。散らしに沿

って説明しよう。時間的な制限もあるので一地域に二軒と決めて、道路沿いの古いと思われる家の門を叩く事にした。

三村、境堂、石川、八木、三ツ谷、高架津とそれぞれ地域を進んだ。

小津で立寄った家では、ご主人が漁をしていた事、大井戸の方迄行った事など話してくれた。ゆっくり出来れば漁の話してやるよと言ってくれた。又友達と行くよとも言ってくれた。こんな出会いがある事に気を良くして、次への足も軽かつ

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(征服の大義)(1000円)
菅原茂美第二作「遙かなる旅路」(2) (定価:500円)
伊東弓子作「風のかげ」 (定価:400円)

打田昇三:ふるさと「風にたずねて」(. . .)
(定価:1000円)

菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価:500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集成!!

ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を喰いたエッセイ集
兼平ちえこ「風に押されて」 (定価500円)
小林 幸枝「風に舞う」 (定価500円)
白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組:800円)
近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組:800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館:0299-46-2457

・いしおか補聴器:0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡13979-2(白井方)
電話0299-24-2063

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を
自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で・・・、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、
連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
0299-55-4411

た。
柏崎、田伏辺りから雨が強くなったが、めげずに進んだ。

高須、玉造、浜、八木蒔、羽生と行く中にも無愛想な人は居なかった。一とおりは耳をかしてくられた。沖州で農家のお爺さんと合った。何十年と川の傍に住んでいても知らなかったよという。玉里はすぐそこだ。天気でも良かったよという。玉と言ってくれて、雨ん中大変だったよという言葉に優しい気持ちで伝わって来た。

小川川尻から川中子、大井戸、高崎と一廻りしておえた。

寒さは忘れていたが、暖かいお茶と和菓子に舌づつみして妹を労った。兎に角知らせる事が出来たという満足感に溢れていた。私にはこれが出来た。知らない所へも勇気を出して行き、声をかける事が出来た。と自信を持てた。その後も何かに取り付かれた様に、もう一仕事だと頭の中は計画が進んでいた。

「御留川」「御留川」周辺の保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校四十ヶ所を一週間の昼の時間を利用して周る事にした。普段と違った様子で主人がアツシー君となってくれた。卒業、卒業という忙しい時期で申し訳なかったが屈する事なく尋ねた。食事時、後睡時、来客中、面談中という状況の中でも耳を傾けてくれた。「回覧して知らせます」「職員会議に話します」「私は〇〇という職員です。確かに引き受けます」「校長先生とも合ってください」と散らしのお知らせからいろいろな話題になって嬉しかった。すっかりいい気持ちになった。やっている事は間違いないと確信した。来てくださいを要求するのではなく、知って頂く事に徹して歩いた事は、自分に出来る役目だと一人自負した。

是も独り善がりだろうか。その日の帰り道だった。四々五人のお婆さん達が止まって一寸見てみるといういなながら堤防の方を指している。わあ！七つの色の帆をはって舟が浮んでいた。土手を草が色彩り始まった。陽の光も明るい、湖を風が渡っている事だろう。散らし配りもやりおえた私は心が満たされていた。虹色の帆をはった船は、私の頑張りを労ってくれているとも思えて幸せだった。船よ川の歴史を積んで未来に進んで欲しい。

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

4月2日(金)より、4月13日まで、兼平ちえこさんが、ことば座の舞台背景画として描いておられます。常世の国の五百相のうち70点余りを展示しております。ぜひお立ち寄りください。

(場所：石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡2158 6
☎0299-24-3881

(3) 聖武天皇

「紫式部は源氏物語を書いた罪で一旦は地獄に墮ちた」とする俗説があるようで、怪奇文学の傑作とされる「雨月物語」の序文に上田秋成が言い訳をしている。なぜ物語を書くに罪になるのか？「文章の中で嘘をつき他人を惑わす」ことが該当するらしくて、宗教史専門の学者が文学との関わりで発表された論文を拝見したことがある。それによれば「嘘を書いて真(まこと)だと思わせる」より「真のことを書いて読者に嘘だと思わせる」ことのほうが罪深いのだそうである。紫式部は自分が生きた貴族社会の真実を、嘘に見えるように上手に脚色したから閻魔大王に怒られた……

荒唐無稽であっても伝説は何らかの真実を物語っているであろうし、例えば常陸国分寺跡のように遺跡や遺構は過去の記録であるが、人間の歴史は権力の歴史なので後世に伝わるのは上層部にいた者だけの話になり易い。源氏物語などは、その典型的なもので、栄耀栄華の陰で苦勞をさせられた庶民のことなどは何も書かれていないから閻魔大王を怒らせたのであろう……とすれば、当時の国ごとに国分寺を置き朝晩、坊さんに有難い経文を読ませるようになった目的も、是まで伝えられているようなものではないように思えてならない。

神龜元年(七二四)二月四日、皇太子・首(おびと)皇子は伯母の元正天皇から讓位され聖武天皇として即位した。時に二十四歳、父親は天武天皇の孫の文武天皇、母親は藤原不比等が名族・賀茂氏の娘に生ませた宮子である。天皇は配偶者と

して既に不比等と犬養三千代との間に生まれた安宿(あすかべ)媛こと藤原光明子を娶っていた。「娶っていた」と言うより「娶らされていた」と言い換えたほうが適切かも知れない。首謀者の藤原不比等は五年前に死んでいるが、聖武天皇の即位で不比等が目論んでいた藤原氏を天皇家に食らいつかせる野望が達成されたのである。

聖武天皇は即位記念のサーブिसとして罪を得ていた者たちに恩赦を施し好い気分浸っていた。そこへ飛び込んできたのは「陸奥国で住民の反乱が起こり行政府の高級官僚が殺された」という報告である。形式的な天皇即位の行事で頭がいっぱいだった政府は、取り敢えず光明子の兄・藤原宇合(ふじわらのうまかい)を大將軍に任命して関東へ派遣した。宇合は不比等の三男で、養老三年(七一九)から常陸国の国司として石岡にいたから周辺の状況には詳しい。

東北地方を抑える拠点の常陸国には常備軍も居り、関東の諸国から徴用した兵士を加えて数万の軍勢を整え、にわか仕込みで軍事訓練を施してから藤原宇合は陸奥へ進撃していった。訓練は不十分でも頭数は多い。蝦夷征伐の美名をかざした侵略軍は半年ほどで反乱を鎮圧し十一月には都へ帰還している。しかし本来は日本に先住していた人々を東北地方に抑え込んだのであるから再び抵抗運動が起こる可能性は高い。即位したばかりの聖武天皇には先ず頭の痛い出来事であった。

当時の太政大臣には天武天皇の子で天智天皇には孫に当たる舎人(とねり)親王が就任していた。この人物は立派な血筋に生まれながら皇位継承の争いには入れて貰えず、実直な役人として「日本書紀」の編纂などに関わった。副総理格の左大臣

には第二話で紹介した長屋王が任命されていて、この二人の皇族を補佐する形で藤原不比等の四人の息子たちや朝廷貴族と呼ばれた昔からの高級官僚たちが聖武天皇の政治を支えていた。

さて蝦夷の反乱は収まったのだが、聖武天皇には気になることがあった。暴風、旱魃、日照不足などで、その年の作物が出来なかったのである。実は、事件の前に空を眺めていた陰陽師が昏間から「火星・金星の変化」を発見し太政官に報告しており、当然ながら天皇の耳にも入る。古代中国では火星が近づくと戦乱が起こると言われ、また、普段はハッキリとしない金星は時々、狂ったように光り輝くことがあって、これを「太白星(たいはくせい)」と称し、何らかの異変が起こる前兆とされていた。心配したとおりに東北地方で戦乱が起こり作物は稔らなると、聖武天皇でなくても気にするのは仕方ないことである。

そこへ何の考えも無い馬鹿陰陽博士が「天皇の御憤みなり」つまり「天皇は行動に気をつけて下さい」と奏上文に書いて届けてよこした。これを受け取った天皇は恐怖心を煽られ、早速、大臣・官僚などを集めて次のように宣言したのである。

「朕は聞く。古来、国王が君主として天地の義に叶うときは陰陽が和らぎ、風雨は穏やかに時を得て災害が除かれ、世の中が安まると言ふ。この度、朕は徳薄き身を以てこの国を継ぐに当り戦々恐々として一物も失うこと無きを念じていたが、世の中を見るとその願いは届かず、誠の心が神仏に届くこと無く、怪しい星が現れ、戦乱が起こり災害が生じた。これを慮れ(おもんばかれ)ば原因は皆、朕の身に有る。古代の例にみる異国の王は、為に徳を修めて禍を消し、仁を行って天地の

異変を止めた。この前例に従って祈らば誠は通じるであろう。」

社会が乱れるのは政治の罪であるから姿勢を正すのは当然だが、天変地異は人知の及ぶところに有らず、蝦夷の反乱は大和朝廷による侵略行為の所為である。それを天皇一人がお祈りしても効果はあるまいにと思つていたところ、何のことはない聖武天皇は三千人の一般人を出家させて近畿地方の寺に置き、十七日間に亘つてお経を読ませたのである。これでは君主が身を慎んで祈願したことにはならない。どうも行動が見当外れのものであり国分寺建立も、その延長線上に置かれる。

効き目が無いのは明白だが、これで少しは気分が晴れた聖武天皇と藤原一族にとつて、「眼の上のタンコブ」のような存在だったのが副総理格の左大臣になつていた長屋王だったのである。この人物は規則に精通していて正義感が強く、悪く言えば融通性に欠けて理屈っぽい性格であつた。

聖武天皇は即位早々に自分の母親である藤原宮子を「天皇の生母であるから大夫人(だいふじん)」と敬称で呼ぶようにせよ」とする勅命を出した。これに対して長屋王は「藤原夫人を大夫人とする勅を出されましたが、定めによれば大夫人の称号は無く、皇太夫人が正規であります。勅命に従えば「皇」の字が失われ、定めに従えば勅命に背くこととなります。どちらに従つべきか御決裁ください」と天皇に申し出たのである。

藤原一族にしてみれば天皇の生母・宮子が皇族では無い負い目があるから、大夫人を皇太夫人にして貰えれば言うことは無いのだが表立つて言い出せない。長屋王は、そのことを逆手にとつて藤原一族を牽制したようにも思えるし、規則に精通

した閣僚として単純に間違いを指摘したようにも取れる。国民には何の関係も無いこの出来事のために役人たちは無駄な時間を費やした。結局は、文書に記載する場合にのみ「皇太夫人」と書き、呼び名は「大御祖(おおみおや)」とするようになり天皇の勅が撤回されることになった。勅の差し替えは前代未聞のことであり、これで長屋王は藤原一族の抵抗勢力と看做されるようになった。

神龜四年(七二七)九月、聖武天皇夫人の光明子が基(もと)といふ皇子を生んだ。二人の間には既に孝謙天皇となる阿倍(あへ)内親王が生まれていたが、藤原氏系の天皇を伝えていくためには男児が必要である。この皇子は生後数か月で異例の皇太子に立てられた。大勢のゴマスリ官僚たちがお祝いに駆け付けたが、長屋王は行かなかつた。

基皇子は母親の実家・藤原氏の屋敷で大切に大切に育てられた。しかし人間動物の一種だから少しは雑菌に触れさせないと強くならない。生後一年ぐらいで病氣勝ちとなり神龜五年九月十三日には満一歳の誕生日を待たず死んでしまった。

その数か月前に内裏では急遽、天皇を警護する親衛隊が編成され「中衛府(ちゆうえふ)」と称して藤原氏の指揮下に置かれた。中衛府は後に「近衛府」に発展するのだが、宮殿を警備する組織は既に衛門府(えもんぶ)と兵衛府(ひょうえふ)が有つて用が足りているのに中衛府が置かれたことは、藤原氏の血を引くひ弱な皇太子の存在と次の天皇の座を巡つて皇族たちの間に何らかの思惑やら暗躍があつたのかも知れない。

そうした状況下での基皇子の死が藤原一族を失望落胆させたのは当然ながら、父親である聖武天皇はそれこそ「夢も希望も失つて」天皇の政務を

三日間放棄した。これを「廢朝(はいちよう)」と言い全ての権力が天皇に集中していた時代には国家機能の停止につながるので正式な記録に残されていない。さらに年末には今光明経六四〇巻を印刷して諸国の国府へ送り付け、亡き皇子の冥福を祈るための読経をさせた。これは明らかに国分寺建立の伏線であるかと推定できる施策である。

明けて神龜六年の二月には、突然に何の証拠も無く二人の下級役人が「長屋王の罪」を密告してきた。内容は「基皇子を呪つていた」というものである。前回の「王朝と仏教」で触れたように裁判も本人の申し開きも無く、二日後には家族ぐるみで国家反逆罪により自殺させられた。日頃から長屋王に近かつた官僚たちが百人ほど逮捕されたが大部分は直ぐに釈放されているのは、この事件が政治的につくられたことを示している。長屋王の正妻は吉備内親王と言ひ聖武天皇の伯母、つまり元明天皇の娘であるから、この事件も聖武天皇の心に傷を残したことである。

それから半年、長屋王一族の新盆も済まないうちに、聖武天皇夫人の藤原光明子を皇后とする詔が出された。祝い事であるから当然かも知れないが皇族、上級・中級の公務員、女官たちには大盤振る舞いの引き出物が配られた。その代り、皇族以外の出身である女性を皇后にする言ひ訳が天皇からくどくどと聞かされた。別に急ぐ必要も無いのに、長屋王を消してまで光明子夫人を慌てて皇后とした藤原氏の野望について、或る歴史書は次のように分析している。

基皇子が誕生するのと前後して、紛れも無く聖武天皇の子である別の男子が生まれた。名を「安積皇子(あさかのおうじ)」と言ふ。当然のことな

から母親は藤原光明子ではない。「県犬養広刀自（あがたいぬかいのひろとじ）」と言い、第二話で紹介した藤原不比等の正妻で元明天皇から「橘」の姓を貰った県犬養三千代の一族である。父親は従五位下で現在の香川県知事に任じられていた。少し官位を上げてやれば娘の身分も上がる。序列は違っても立場は光明子と同じであるから生まれた男子の皇位継承権は皇子の次に位置する。

皇子が亡くなり、光明子に次男が生まれなければ聖武天皇の皇子は安積親王だけとなり、県犬養氏が天皇に接近し藤原氏は日陰になる。いくら光明子の母親の家系だとは言っても「藤原」から見れば「邪魔者」でしか無い。県犬養広刀自は、安積親王の他に井上内親王らを生んでおり、後宮内では藤原光明子に匹敵する地位を得られる女性であった。井上内親王は後に光仁天皇の皇后となり、皇太子候補にもなるべき他戸親王（おさどしんのう）を生んだが、やはり藤原氏の陰謀で庶民に落され母子で恨み死をしている。

そういう因縁があるから、藤原一族にしてみれば権力を繋ぐためには何としても二十九歳になる光明子の男児出産を期待しているが鶏ではないので都合良くは生まない。そこで苦肉の策として、天皇の死後に「中継ぎの天皇」となれる**皇后の地位**を狙ったというものである。反対派のボス・長屋王が消された後は、皇族出身では無い皇后を立てることに異議を唱える者は居ない。

話のついでにという気毒だが、気の毒ついでに安積親王のことを紹介しておく、聖武天皇の第二皇子として生まれ、第一皇子が死亡したので必然的に皇太子に立てられる立場である。聖武天皇は早く皇太子にしたかったと思うのだが藤原

一族と光明皇后に遠慮して言い出せない。高校三年生ぐらいまでは元気で常に父親の聖武天皇と行動を共にしていた。丁度、石岡では国分寺の建設工事が進まずに役人が苛立っていた頃に、大阪へ出かけた天皇のお供で移動中に足を痛めた。捻挫か骨折かは記録されていないが心配した天皇が治療のために家来を付けて奈良へ帰した。動かずに居れば治るのだが、どういう訳か三日で急死してしまつたのである。暗殺説があり犯人も分かっているらしい。勿論、藤原一族の仕業である。

天平五年（七三三）正月早々には光明皇后の実母・県犬養橘三千代が病死した。気の毒な安積親王はこれで強力な後ろ盾を失つたのである。この年の七月には政府の事業として盂蘭盆の供養行事が行われた。長屋王を始めとして藤原一族に恨みのある亡霊たちが奈良のホテルを借り切つて集まつたことであろう。これも聖武天皇に国分寺建立を思いつかせた原因の一つであろうと思える。

その頃の藤原一族は不比等の長男・武智麻呂が右大臣となつて政権を担い、次男の房前（ふさざき）、三男の宇合と四男の麻呂は各地の反抗勢力を抑え込み国防力を強化するために將軍として地方回りをしていた。中央政界に居たのは長男だけであるが、弟たちは天皇の側近や軍勢力を掌握する仕事をしてから政治に加わつてきたので、他の氏族が対抗できなかったのであろう。

藤原武智麻呂が右大臣に就任した頃に、入唐の大使（につとつうのたいし）、つまり遣唐使の一行が戻ってきた。後に菅原道真が廃止を建言したように多学の費用と年月をかけて実施した遣唐使の派遣は海外渡航の大きな危険が伴うもので、成功率も低かった。この時に帰ってきた留学生の吉備真

備（まきびのみまび）などは十七年も前に中国へ行き、暫く帰つて来られなかったのである。

その吉備真備と共に帰国した僧侶の玄昉（げんぼう）は留学生生活で集めた膨大な量の経典を持ち帰り真備もまた文献を担いで船から下りてきた。当時の学問：と言うか、インテリジェンスなものは本場・中国のお経しかなければ、吉備真備と玄昉の二人は忽ちにして日本の文化人のトップに挙げられた。二人は聖武天皇に拝謁して唐の国で仕入れた知識を披露した。程なく二人は高官として政府に迎えられた。橘氏の推薦である。

吉備真備たちが帰国した天平七年は西暦七三五年で、国分寺建立の詔が出される六年前である。その頃は北方の蝦夷だけでなく日本国中が荒れていた。天皇を中心とした権力に抑え付けられていた民衆は、さらに山賊や海賊の被害に脅かされていて都でも強盗が横行する状態であった。そして対外的には、藤原三兄弟が地方回りで防衛力の強化に努めたように、海の向こう朝鮮半島の新羅との関係が悪化していたのである。その新羅から関係改善のための使者がやってきた。

その後に伝染病の天然痘が流行したのである。入れ替わりに新羅へ往復した日本の使者の所為かも知れないし、遣唐使一行が帰つて来たのも同じ頃なので唐も疑わしいが新羅とする史書が多い。兎も角、天然痘が九州全土に流行し徐々に本土へ迫つて来る。翌年には藤原四兄弟も年齢の順では無かったが仲良く天然痘に連れて行かれた。最後まで抵抗したのは常陸国守として石岡に居たときに筑波山に登つて身体を鍛えた藤原宇合である。長男の武智麻呂などは右大臣から左大臣に栄転した日に辞令を握つて死んでいる。

伝染病のことを知らない聖武天皇は、深く責任を感じて有名な神社にお賽銭を届けたり、宮中へ七百人の坊さんを集めて般若経と金光明経を読ませたりしたが、坊さんと呼ぶのは筋違いで葬式と勘違いをされて死者は増えても病は収まらない。

病気というのは妙に公平なもので、威張っている奴でも庶民と同じようにやられる。この時も政府要人が全滅したので、困った聖武天皇は、無実の罪で消した長屋王の弟の鈴鹿王を連れてきて政権を担当させた。補佐役は第二話に登場した橘諸兄、つまり藤原不比等と再婚した橘三千代の子であり光明皇后には異父兄になる人物である。ここで藤原一族が絶えていれば日本の歴史は根本的に変わっていたのであるが、四兄弟の息子たちが成人しており当然のように親の地盤を相続したから日本は駄目になった。尤も四兄弟のうち長く残って根を広げたのは次男・房前の系統だけである。

その頃、天皇の生母で「皇太夫人」の呼び名に長屋王からクレームをつけられた藤原宮子が天然痘では無いが少し体調を崩した。精神的な疲労であるから薬は無い。そこで唐の国での修行を積んできた僧侶として玄昉が呼ばれた。なるべく難しい経典を広げた玄昉は、催眠術を使った加持祈祷を施し宮子夫人の気晴らしに成功した。一説によれば怪しい祈祷だったという。

久し振りに母親のスッキリした顔を見た聖武天皇は喜んで、玄昉と吉備真備をセットで側近に登用したのである。橘諸兄も有能な官吏として二人を重く用いている。これに反発した人物がいた。藤原宇合の嫡男である。名を広嗣（ひろつぐ）と言う。当時、二十歳代で官位は従五位の下、これは出羽、下野、駿河など大國の国司と同じであり

国防の前線基地である太宰府の次官として赴任していた。一般の官僚からすれば文句を言うどころでは無いのだが、広嗣は玄昉と吉備真備に嫌われ「父親の宇合が將軍として軍事面を担当していたから…」という理由を付けて左遷され九州へ飛ばされていたのである。同時に官位を貰った従兄弟の藤原豊成は参議として政治に関わっている。

中央では自分の従妹である阿倍皇女が皇太子の指名を受け、次の世代の展望も見えている。その様な時期に自分が何年も九州に置かれるのは堪え難い。この人事を押し付けたのは玄昉と吉備真備であろう。藤原広嗣は朝廷に対して上表文、つまり天皇への意見書を送り付けた。内容は当然ながら聖武天皇に対する政治批判であり、玄昉と吉備真備の追放要求である。これが都に届いたのは天平十二年八月二十九日だとされている。その二か月ほど前に、これは明らか分寺建立の予告篇のように諸国には「法華経を十部書写すること」「七重塔を建てること」が通達されていた。

天然痘の流行が下火になった時期に法華経を写したり塔を建てるのが何になるのか：国民は貧しい暮らしに伝染病で疲弊している。全ては玄昉と吉備真備が聖武天皇にへつらうために献策したことと違いない。藤原広嗣の出した意見書には、そのことの批判も含まれていたであろう。

意見書を見た政府の高官たちは、相手が光明皇后の従兄であるだけに扱いに困って何度も読み直したり、棚に置いたりしていた。数日が過ぎて九州からもっと悪い知らせがきた。藤原広嗣が太宰府の軍勢を集めて福岡県遠賀川付近に城を構えたという。これは政府にとって都合の良いことで、直ちに討伐軍が編成され一万七千ほどの兵が九州

へ向かった。広嗣の兵力も一万以上は居たと思われるが、政府軍は恩賞を仄めかせて兵士を動揺させたので遂に討伐されてしまった。十一月には広嗣が逮捕され、やがて死罪に処された。この事件は国分寺建立の詔が出される前年のことである。

歴史書によつては、藤原氏に替って政権の座についた橘氏（橘諸兄）の陰謀によつて藤原広嗣が挑発されたとする説があり、反対に藤原広嗣は根っからの悪人だったとする意見もある。その頃の出来事から見ると橘氏の陰謀説が真実に近いように思えるが、どちらにしても聖武天皇に与えたショックは大きく、ハッキリ言えばノイローゼに罹つてしまったようである。「朕は暫く東の方へ行くと」と言い出したのである。東の方と言われると、一番遠いのは常陸国府のある石岡なので取り巻き連中は慌てたのだが取り敢えず大急ぎで準備を始めた。普段から退屈しているから元正太上天皇や光明皇后も一緒だし、大臣も同行する。

皇后の甥で、後に恵美押勝として孝謙天皇時代に反乱を起こす藤原仲麻呂が率いる騎兵四百騎に護られた一行は、先ず東に向かってゆつくりと進み、現在の三重県、岐阜県、滋賀県辺りを巡回させた。それから山背国（やましろのくに）と呼ばれる京都府の南部に行った。この土地は橘諸兄の本拠地とされるので「藤原広嗣の乱」が諸兄の挑発だと言われるのである。そして恭仁京（くのみや）と、近江の紫香楽宮（しがらきのみや）に御所を造らせ、何年もの期間を奈良へは戻らずに過ごしたのである。蛇足かも知れないが、これらの中で多数の国民が働かされ、莫大な国家予算が無駄に使われた。天皇が居ないから奈良は都にならず、それどころか奈良に残留していた役人

たちは「ぐずぐずするな！」と怒られたらしい。これは事実上の短期間遷都になる。呆れたことだが聖武天皇は、難波のほうにも出かけている。

その時に、河内国大県郡（かわちのくににおおあがたごおり）現在の大阪府柏原市に在った知識寺という寺で、天皇はとんでもないものを見たのである。河内国は大陸からの帰化人が多く住んでいた地方である。仏教は盛んであり仏像を造る技術にも優れていたから、地元の人たちが私財を出し合って知識寺に大仏の像を建てていた。大仏は正式な名称を「毘盧舎那仏（びるしゃなぶつ）」と言う。「光明遍照、華嚴教主、大日如来」などとも呼ばれる。それは誰もが見たこともない大きさであったから、ノイローゼで仏教を信じる聖武天皇は本物の仏が出現したように感じ、光明皇后もまた、自分の名前の由来する仏なので感動した。

その立派な大仏が、自分の治める国の片田舎にさりげなく建てられている。こういうものは本来、天皇の意志のもとに建造されなければならない。その思いは光明皇后も同じであり、むしろ、皇后のほうが強かった。何しろ自分の甥が九州で謀反を起こして処刑され、それが原因で天皇がノイローゼになったのである。これは、是が非でも勅命により建立される大仏が必要である。

その頃、光明皇后の発案により藤原一族が相談して「広嗣の乱」のお詫びに、不比等に与えられていた膨大な封戸（ふこ）の五千戸分を朝廷に返納することにした。封戸は奴隷制の名残で、該当する家に課せられる税金の全てが貰える仕組みである。申し出を受けた政府は三千を受け取って二千を返した。返された分を受け取るのも凶々しいが政府は三千を分けて諸国に仏像を造らせる費用

に充てさせた。仏像が二m以上に指定されていたから安くは出来ないし、置く場所も限定される。

これは、天皇が建立する大仏のご利益を諸国にも与えようとする有難い配慮であるが、見当違いも甚だしい。天平十三年（七四一）春先に「諸国国分寺、国分尼寺」を建てるように命令が来た。悪い例えで申し訳ないけれども「名犬の仔犬を与えるから立派な犬小屋を建てろ」と要求するようなもので、言われたほうは莫大な出費を強いられることになる。それだけでなくも政治が無能化し、疫病、凶作、暴動など庶民はドン底の暮らしをして

いる。大きな寺など造れる状況ではなかったから記録に残るように国分寺の建設は困難を極めたのである。それでは聖武天皇が念願する大仏建立が進められない。朝廷は三年後に税金を投入したり地方の役人に出世をちらつかせて督促させたりしたが、諸国で完成したのは五十年も後らしい。

一方で、聖武天皇が狙う大仏建立も順調にはいかなかった。先ず、場所の選定で聖武天皇は自分が各地を回っている間に住んでいた京都南部が良いと決めた。これに対して官僚たちは首都の奈良にすべきだとして意見を具申ししたが、採用される筈も無く京都南部に決まった。そこで測量を終えて工事を始める矢先に山火事が発生したために天皇も已む無く奈良にしたと言われている。この火事は反対派の放火とする説もある。

こうして奈良に大仏が造られ東大寺が建てられて国分寺総本山となるのだが、資金面で困っていたのを救ったのが初代常陸守・百濟遠宝の甥であり常陸守となった百濟王敬福であったことは市民の知るところである。何事も先立つものは金であり、労働力である。その条件は諸国国分寺でも

同じなので幾ら偉そうなスローガンを掲げてても犠牲になるのは一般庶民であることに変わりはない。

したがって国分寺は聖武天皇が「律令体制の動揺を防ぎ、社会不安の一扫を図るため、仏教による鎮護国家を念じて建立させた」という有難いような、そうで無いような話を真に受けると閻魔大王に怒られるので、苦勞をさせられた庶民の立場から建立の経緯を考えてみたのである。何よりも遺跡遺構が粗末にされているのが残念である。

国分寺余話 あとがき

西暦六六三年、日本の暦では天智天皇の二年に「白鳳」という年号が使われ、また、斎明天皇が四国で亡くなり天智天皇が即位した六六一年も白鳳元年になっているから何か疑わしいけれども、その白鳳の三年に日本軍は朝鮮半島「白村口の戦い」で唐と新羅の連合軍に負けてしまった。

四国の大本営に居た斎明天皇の死因は地元の神社の神木を伐採して御所（行宮）を造ろうとしたから罰が当たったとされている。相手の神様は猛獣の虎の皮の褌をしているような恐い神様であるから、天皇といえども威光が効かなかった。

天皇家が神様の子孫だという作り話は天武天皇が壬申の乱で大友皇子の軍と戦うのに兵力が足りなくて伊勢や熱田の豪族に助けて貰い、そのお返しに、それまでは天皇の身近に置いていた「八咫の鏡」などを伊勢氏の氏神に預けてからのことである。それを明治政府が徳川幕府との違いを強調するために神の系統を創作して国民に強要した。

言い訳が長過ぎたが、白鳳三年に日本が敗戦国となった際には、大勢の新羅軍（一部、唐の軍勢も居たかどうか？）が占領軍として日本に進駐し

ていたとする説がある。攻めていった戦で負けたのだから逆に攻め込んで来られても仕方がない。ただ進駐軍は九州を重点に占領したらしく、関東までは来なかったから、我々の祖先である縄文時代の人々も朝鮮語の「ギブミー・チョコレート」を知らない。(知らないほうが良い)

西暦五二二年、遅くとも五三八年には日本に仏教が伝わっており、それを信仰する者も貶す者もいて：日本人は古代エジプト人と同じで何でも神様にして崇めるから、その数は八百万柱にもなり名前を覚えるのも容易では無いのに「異国の神」とされていた仏像を拝む余裕は無い。

蘇我氏と権力争いをしていった物部氏は仏教を受け入れた蘇我氏に対抗して「邪教」扱いしたから仏教も一時的に宙に浮いていたが、西暦五八七年に物部氏が権力を失い、蘇我氏の王朝が成立するに及んで、実在を疑われてはいるが「聖徳太子」なる人物をはじめ日本でも仏教の信者が増えて人々の間に広がり始めた。

西暦六四五年乙巳の年に、いわゆる大改の改新というクーデターで蘇我王朝が滅ぼされたから、仏教も保護者を失った状態になったが、それでも大陸から渡来した人々によって仏教が細々と信仰されていたところへ、仏教国の新羅から進駐軍が来たのだから異国の神も人々の間に知れ渡った。兵士たちはチョコレートの代わりにお経を書きつけた紙を子供達にプレゼントしたかも知れない。

昭和二十年の敗戦と違って、勝者も敗者も同じような民族であつたうえに、勝者側の占領軍を出していた新羅国が唐の国に近くなり、仏教を通じて占領国も被占領国も一体感が強くなり同化していったのであろうか。頻繁に往来した「遣唐使」

には大勢の付録が付いていって、唐の文化が次々と日本に伝わってきたけれども、その多くは仏教関係のことであつたろう。

聖武天皇が即位した西暦七二四年は大化の改新から七十年経っていわゆる「大和朝廷の天皇制」も板に付いてきた時代である。同時に、日本に伝来してきた仏教も、浮き沈みは有ったが二百年の時を経て完全に日本の宗教として定着し、信者に天皇を取り込んだことで大きな力を持つてきた。

「国分寺余話」では仏教の伝来から諸国国分寺建立に至る各時代の裏側の歴史を断片的に紹介してきた。諸国の国分僧寺、同尼寺は大部分が当時の面影を留めず、僅かに遺構が何か所かに残るだけの現代に「国分寺」の話をしても意味が無いかも知れない。しかし例え遺構だけでは雖も、これを国家、或いは地方の歴史として見た場合には大勢の見学者が訪れる奈良・正倉院の宝物と同じ価値があるのではないか？

「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」ことをモットーとしている「ふるさと“風”」の会員としては、屁理屈と叱られることを覚悟でそのように考え、三回に分けて書かせて頂いた。

お読み頂いた皆様にお礼を申しあげます。

今回は唐突ですが「中国大陸の国分寺」です。

中国大陸に国分寺があつた——と言うよりも聖武天皇が諸国に国分寺を置くことを考えたのは、中国大陸から伝えられた情報によるのです。

進駐軍は居なくなつても「白村口の戦い」に負けた日本は、大唐帝国の思想的占領に抗し得なかつた……ということでしょうか。

ふる里の歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ

(毎月第2土曜日 19時より)

いしおか補聴器では、らふるさと風の会、ことば座の協力で、ふるさとの歴史・文化の物語を、囲炉裏を囲むような形で、朗読に聞く「ふるさと知ろう会」を開催しております。

4月10日の第5回朗読会は、打田昇三作「興亡の連鎖(その二 権威の迷宮)」です。

「現在の石岡市が元気が無いのは、古代の国府だったこの地に連綿と続いた豪族が六百年前の事件によって没落してしまったことに遠因があるように思えてならない。

今回は、石岡の大掾一族が滅亡へひた走る戦乱の世の物語を、打田史学に考証して行きます。

定員は10名程度となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。

朗読後、作者を囲んでのお話し会があります。

朗読会参加料金 1,000円 (コーヒーor お茶、お菓子付き)

いしおか補聴器 ☎0299-24-3881

【特別寄稿】

私のスペイン旅行記(2)

ギター文化館代表 木下明男

Ⅲ 観光

今回の旅行は、観光が目的でないので余り観光はしていない。訪問した順に記したい。

はじめに到着したマドリッド、寸暇を惜しんで市内の散策。全体的には古い町なのだろう、何々宮殿だとか何々広場がやたらに多い。歴史を知っているわけでもないし、横文字の名前は覚えられない。

お昼を食べたレストランは昔から名士が集まる場所だった。ふんだんにシャングリアを飲み、腹いっぱい食べて50ユーロは高いか安いかわからない。

マドリッド市内のギター製作家の工房を見学した後、夜はカナリア会館にてコンサートと食事会。やたら大きな都市(人口500万?)。交通渋滞と高い建物。

マドリッドを満喫する暇もなく、マラガを経て次の宿泊地コスタ・デル・ソルのアルムニェカルへ。海沿いの瀟洒なホテルに宿泊。このホテルを根拠としながら、隣町のネルファ・フルヒリアーナ等を見学。温暖な地中海性の気候なのだろう、随所にブーゲンビリアを始めとする南国の花が咲いている。初めてジャカラランダの紫に咲いた花を見る。

古くからの街、ネルファには巨大な洞窟(鍾乳洞)がある。古代人が住んでいたと言われているそう。随所に山が海岸まで迫っており、その山から地中海を眺められる。その中で、一際美しい

街並みがフルヒリアーナ(白壁の町)。

白壁が迫る曲りくねった細い道々を進んでいくといつの間にか頂上に着く。頂上に辿り着くまでに、彼方此方にブーゲンビリア等の原色の花々が咲き誇り、随所に小さな店が開かれている。周りの山々の中腹や頂上に小規模ではあるが、同じ様な集落が随所に見られる。地中海を眺める為に来る保養地なのだろう。

次に行く町はグラナダ、そしてあのアルハンブラ宮殿。アルハンブラは天候の変わり易い所らしく、同行していたI・Nさんは4〜5回来ていても晴れたことが一回も無いと言う。

心配していたが、見事な晴れだった。入り口から宮殿に辿り着くまでに見事な糸杉の回廊(並木道)を進んでいく。宮殿は想像していたより、はるかに規模が大きく、1、2回では全てを見ることは出来ない。秋だったので、紅葉した木々と周りの白い点在した街並みは、正に映像として打って付であった。宮殿の歴史的な重厚感と木々の季節感新しい街並みがうまく調和していた。ここは、漠然として見るのではなくイスラム文化とキリスト文化の交差した所なので、その様な歴史観などを感じながら(予め調べる)見るとまた、違った趣が出るのでは。今回は眺められなかったが、外から眺めるライトアップされた宮殿とシエラネバダ山脈を見たかった。

グラナダ郊外にあるアルハンブラの雄姿を外から眺めるのも良いのかな。宮殿の近くにあるアントニオ・マリン・モンテロ工房を見学し、市内でギター文化館設立のきっかけになったマヌエル・カーノの子息ホセに会う。

ホセとは数年ぶりの再会だったが元氣そうだった。

た。時間が無かったので、2時間くらいで分かれた。翌日には、今回最大の目的、リナレスへ入る。勿論セゴビア国際ギターコンクールが開催されているからだ。そこで、審査員を頼まれ、審査をすることになっている。

(続く)

ことば座「風の塾」生徒募集!

ことば座では、暮らしの中で自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」を開いています。

絵と一行文教室(講師: 兼平ちえこ 白井啓治)

朗読教室(講師: 白井啓治)

エッセイ教室(講師: 白井啓治)

(各教室は月二回の授業。受講費月額3,000円)

詳しくは「ことば座事務局」☎0299-24-2063(担当: 白井)までお問い合わせください。

風の談笑室】

木村進さんのお力を頂きHPが立ちあがったら、結構見てくれる人がいて、先日も会報の13、14、15号の内容がみな同じですよ、との連絡を頂いた。大変ありがたく、嬉しいことである。

嬉しいといえば、風の会を応援して下さっている斎書房の太田さんより、兼平さんを通じてお叱り（ユーモアのある）を頂いた。というのは、太田さんが編集されている「常総の歴史」という雑誌に、風の会の小冊子を取り上げ、紹介して頂いたのですが、そのことのお礼を本紙に書く積りでいたのですが、忘れてしまったのであった。そうしたら、太田さんより兼平さんに、木村さんのことなどをちゃんと取り上げているのに、私が風の会小冊子を取り上げた事を一行も書いてくれない、と親しみを込めた備みごとを言われてしまった。いやいや、失礼なことをしてしまいました。遅まきながら、改めてお礼申し上げます。

さて、斎書房の太田さんには何時も色々な形で応援や御指導を頂いており、今回は、打田兄の「国分寺余話」に登場してくる長屋王についての御指摘を頂いた。それについて、打田兄から早速、返礼の文が編集事務局に届いた。

「長屋王」論議

打田昇三

郷土の歴史について幅広く専門書を刊行しておられる「斎書房」の太田尚一さんから、いつも貴重なご意見を頂いている。今回、教えて頂いたのは昭和六十三年（一九八八）に奈良国立文化財研究所が発掘した長屋王邸宅跡から出土した木簡（鮑IIあわび献上？）に「長屋親王」と表記され

ていたことについての問題点である。

お電話で知らせて下さったあと、ファックスでA新聞の文化欄記事コピーを送って頂いた。それに基づき斎書房の「常総の歴史第三号」を入手して茨城キリスト教大学学長（当時）志田諄一先生が書かれた『「長屋親王」の木簡をめぐって』を拝読した。要旨は：天武天皇の孫である長屋王のことを長屋親王と表記したのは、長屋王が皇太子もしくは皇太子に準ずる地位にあったことを物語るものではないか：というものである。

「官職要解」によれば、唐（中国）の制度で、親王は天皇の兄弟又は天皇の子に限られ、それ以外の皇族は「王」と表記されることになっている。

長屋王は、天武天皇の長男・高市皇子（たけちのおうじ）の子、つまり天武天皇の孫である。高市皇子は文武ともに優れた人物だったようで「壬申の乱」には戦場に赴き、また和歌でも万葉集に名を残している。母親の身分が低いというくだらない理由で皇位継承の対象から外され、政治家として義母に当る持統天皇を支えた。立派な父親の子であるから長屋王も優れた人物であつたらう。

素人の私は不謹慎ながら「鮑」の木簡が出た場所が現在スパーマーケットになっていることが出来過ぎに思ってしまうのだが、専門の先生方は「王」と「親王」の書き分けから、より深く当時の状況を推察しておられる。太田さんに教えて頂いてから手持ち史料を見直すと「常総の歴史」に木簡の記事が出た頃、Y新聞の歴史欄にも奈良大学教授が書かれた『長屋王「親王」表記の矛盾』という記事が載せられていた。

こちらの方は漢語の日本語表記から「皇」「皇子」「親王」「王」が、いずれも「みこ」と呼ばれると

ころから長屋王の邸宅内では親王と同じ呼び名を使い、家来どもが「みこ」と呼び、内部文書では「親王」と書いていたと推定すると共に木簡から垣間見る長屋王の贅沢な暮らしぶりに触れている。

それらを参考に「長屋王（又は長屋親王）」の呼び名を考えると、次のように思い付く。

① これは作家の永井路子さんが言われたことだが：蘇我系の持統天皇、元明天皇、元正天皇からすれば、藤原系の聖武天皇には簡単に皇位を渡したくない：そこで一時的かも知れないが、長屋王が皇位継承の対象になったことがあり、親王と呼ばれた。

② 「みこ」の呼び名が親王にも王にも当てはまるので、長屋王の屋敷内では「親王（みこ）」と呼んだり書いたりしていた。

③ 長屋王の正室は元明天皇皇女の吉備内親王であるから、そのバランスから特例として「長屋親王」と書くことを許された。

④ 藤原不比等が死に、その後任として長屋王

が政界に進出してきた。上司の太政大臣は長屋王の叔父で温厚な人物の舍人親王である。元正天皇が甥の聖武天皇に皇位を譲る際に長屋王は「目付役」のような存在で左大臣になった。そこで周囲の者が自然と「長屋親王」と呼ぶようになった。

⑤ 聖武天皇は、長屋王が無実の罪（藤原氏の陰謀）で家族ともに自害させられた

事の真相を知らなかった。事件の後で知った天皇は精神的に動揺し後悔の念に苛まれ、長屋王に対しても大きな負い目を感じていたであろう。藤原氏の手前、表立った供養も出来ないが、せめて「親王」と呼ぶことぐらいは認めたであろう。

⑥ 日本書紀のように、長屋王の死を気の毒に思う後世の者が、藤原氏の陰謀への抵抗心を込めて「長屋親王」と呼ぶことにした。

事の真相解明は専門の先生方にお任せして、以上の理由のうちどれかが当たっていれば幸いである。なお、徳川吉宗が將軍になる前年に書かれた野史の「前々太平記」(著者不明)には「長屋王逆心」として次のように記述されている。

「…天平元年二月、左大臣長屋王、如何なる宿意や有りけん、徒党を駆聚め、密に謀叛を企て国家を傾けんと巧まれける…帝大に驚かせ給ひ、長屋王、朕に向て何の恨かあるべき、急ぎ実否を正さるべしとて、式部卿藤原宇合に命じて、軍卒を率い長屋王の居宅を囲ましめ、別に舍人親王を遣して実否を糾問せらるに長屋王、何と陳するとも其罪科逃るまじき事を察して、一間なる處に搔籠りて、其妻吉備内親王、併に息男膳夫王を刺殺し、其身も自殺したりける…此長屋王と申すは天武天皇の御孫、高市皇子の御子なり、氏族と云ひ官祿と云ひ、何不足も無き身なるに、此度の逆心、其虚実は知らねども、偏に天魔の所行ならんと、人皆是を悔みける」

「長屋王」について勉強することが出来ました。太田尚一さんに厚くお礼を申し上げます。

この会報もあと一回で四年をクリアする。今月号は目前の四十七号である。四年間、四十八号。数字的には大したことはない。しかし、毎月発行し、会員の全員が毎月原稿を書くというのは、実は大変なことである。この事は、自画自賛であっても、大いに自慢して良い事だと思つ。

現在 20 ページを基本に編集しているが、20 ページを埋めるには、400 字詰め原稿用紙およそ 100 枚の原稿を書かなければならない。

毎号、ゲスト執筆者の方がおられるが、100 枚の原稿を六名が分担して書いているのだから、凄い。しかも毎月なのだから、気分は流行作家なのではないだろうか。特に打田兄は、毎月 30、40 枚の原稿を書いているのだから、頭が下がります。

会員の中には、私の文章なんか読んでもらっているのだろうか、と話す人もいる。しかし、私は読者というのは執筆者と同様にオンリーワンの感覚、考えを持つておられるのだから、あなたがオンリーワンの思いを書けば、必ずあなたのファンがいます、と話している。会員で一番新しい菅原さんは、よく「私の書いた物なんか…」と口にされるが、今回、作家の「ノ瀬綾さんからのお便りに、菅原さんの「人間の本性」について大変面白く読ませてもらったとあり、菅原兄は大喜び、私は、会員の皆さんには、何時もこのように話をしていく。文章の上手い下手など、ありもしない尺度を持つて考えないで、自分自身を表現したものには、必ずそれに共感や感動を覚えて、読んでもらえるもの、だ。

それへーノ瀬綾さんからの思わぬ好評が届いたものだから、菅原兄は大喜びである。文章に限らず、表現者にとっては、好評であれ酷評であれ、反応が頂ける事は大層嬉しく、励みにもなるものである。これで、

菅原兄にも一層の気合で書いてもらえるのではないだろうか。

コーヒーブレイク

珍味「熊掌」(ゆづしゅう)

菅原茂美

「孟母三遷の教え」「孟母断機の戒め」でお馴染みの「性善説」元祖・孟子は、どうやら二千三百年前、母子家庭の子であつたらしい。孟母は教育ママの走りか、モンスターペアレンツの元祖か？ 孟母ではなく「猛母」といわれりや領ける。墓場↓市場↓学校の近くと、引越しのレンチャン。やつとセガレが学校ごっこをやり、勉強するようになったと言うが、転居は 2 回なのに、三遷はおかしいと思つていたら、中国では、「三」は、「たびたび」程度の意味だという。

さて、賢人孟子は人並みにグルメで、古来中国の超珍味「熊掌(熊の手の肉球)」が大好きであつたらしい。ところが、お節介の知ったかぶりか口をはさむ。熊は冬眠に当たり、腹一杯餌を食べ、最後に蜂蜜を右の手にたつぷりなすりつけ、時々目を覚ましては掌を舐め、また眠る。それゆえ右の掌は超美味だが、左手は、食べすぎた物が飛び出さないよう、いつも肛門にあて、抑えているので、便の匂いが染みついていから、左の掌は買うもんじゃねえぞ。…とのたまえり。

(出典：佐久協「孟子は人を強くする」祥伝社新書)

いしおか補聴器の阿部さんの御協力を得て、毎月第二土曜日、午後七時から「ふる里の歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べ・ふる里知ろう会」というのを開いている。4月10日の会でもつ6回になる。6回ということも言つてもないが半年である。始まつたばかりと思つていたら、もつ半年が過ぎるのである。

10人程度しか席が無いのであるが、なかなか全部が埋まる事が無い。当面、朗読物語の執筆は打田兄にお願いし、歴史の里石岡に関連した話を書いて貰つているのであるが、石岡の人達には「歴史の里」という事に興味を示す様子が全く無いようである。

とはいえ、かく言つこの編集人も歴史好きというわけではない。しかし、自分が住んでいる所の自慢ぐらいはしたいものと、興味を持つてゐる範囲でふる里の歴史・文化に接してみている。

第1回から4回までは、国分寺に関する話を余話として打田兄に書き起こしてもらつたのであったが、国分寺の建立についての経緯を余話の形で見てみると、自分達が小中学生の時に教えられた内容が如何にお粗末で間違だらけのものだったかが認識でき、実に面白いものであった。

このふる里知ろう会は、朗読をきっかけとして、ふる里の歴史・文化の色々な側面を茶飲み話として語り合う事を一番の目的としているのであるが、参加される方たちに、石岡の人が居ないのは淋しい限りである。国分寺余話は取敢えず、今月号に掲載したもので、一区切りとなるが、国分寺そのものは歴史的にさほど重要なものではないが、石岡に残されてある遺構は、重要な文化遺産として考えてもらいたいものである。打田兄の書かれた最後の段をもつ一度紹介してみたい。

…「国分寺余話」では仏教の伝来から諸国国分

寺建立に至る各時代の裏側の歴史を断片的に紹介してきた。諸国の国分僧寺、同尼寺は大部分が当時の面影を留めず、僅かに遺構が何か所かに残るだけの現代に「国分寺」の話をしても意味が無いかも知れない。しかし例え遺構だけでは雖も、これを国家、或いは地方の歴史として見た場合には大勢の見学者が訪れる奈良・正倉院の宝物と同じ価値があるのではないか？…

三月の初めに、村上龍神山に始めて登つて来たのだが、頂上が上がつて驚いたのは、遠目に見る以上に龍神山の破壊は大きなことであつた。

採石場になつてゐる所は、私有地であり、砕石そのものは合法的なものであるから、業者には非難を言つて気持ちは全く無い。しかし、龍神山は石岡の歴史的遺産として保全されなければならぬ所であり、しかも市の所有地であつたものを売却してしまつたという文化認識の程度の低さに、今は何を言つても始まらないのであるが、呆れてしまふ。

頂上の祠の前に立つて見わたすと、水戸方面に向かつて望む一角だけが、かつての国を思わせてくれるが、

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。
営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00
月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

石岡市街から土浦、筑波、八郷地区へと目を映すと深く抉り取られた採石場がいきなり飛びこんでくる風景になつてしまつてゐる。

この山が常陸国風土記に書かれてある輔時臥山だと主張する人もいるが(石岡市史もそうなつてゐる)それならば何故民間に売却するのかと不思議である。しかし、そうした感覚が、補助金をもらつただけの歴史の里としてしまつたのだらう。

風語り

草風亭雨露

庭の一坪農園に、今年は何の種をまじつつかと毎日思索するのであるが、天候が乱高下するものだから、なかなか決まらないでゐる。

・ 茄子の苗植えた早く花の咲け実のつける
毎年茄子の苗は植え付けるのであるが、三本も植え付けると、家族二人では持て余すほどに、茄子の実りがある。

・ 薄黄色のオクラの花にカマキリのぎよる目
三年ほど前にオクラの種をまき、その花の静かなる美しさに、すっかり魅了され毎年種を蒔く。真夏の早朝、朝露を乗せて、透ける様な黄色の花を見ると、何とも言えない幸福感を覚える。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com>

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。

研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

募集要項

募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
募集人員：6名程度（最大10名まで）
面接及び朗読と簡単な演技表現試験有り
養成期間：1年間（入塾は随時受付ています）
指導月4回
受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）
詳しくは、下記ことば座事務局までお問い合わせください。

舞台衣装等のデザイン・製作に興味があり、ことば座にボランティア参加して頂ける人、募集しております。

現在舞台背景画担当として風のことば絵作家の兼平ちえこさん、舞台装美として小林一男さんの参加を頂いております。

興味のある方、事務局の白井まで連絡下さい。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp

詩を手話の舞に楽しむ「朗読舞教室」受講生募集中!!

ふる里に生まれた詩歌を朗読舞に楽しんでみませんか。

ことば座は、物語の朗読を手話を基軸とした舞(朗読舞)に表現する劇団で、朗読舞を演じる小林幸枝は、世界でただ一人の朗読舞俳優です。

教室は、第二、第四土曜日午後2時からを予定しております。

受講料は、月額3,000円です。(教室は、国府公民館そばの、ことば座稽古場)

(講師：小林幸枝 白井啓治)

詳しくは、下記ことば座事務局までお問い合わせください。

ことば座事務局(白井) ☎0299-24-2063

朗読舞劇団「ことば座」

ことば座は、ふるさと「常世の国」の暮らしの歴史を大切に考え、明日の希望の物語を朗読舞に表現する劇団です。朗読舞は、ふるさと「常世の国」に生まれた全く新しい舞台表現です。朗読を「手話を基軸とした舞い」に演じる小林幸枝は、世界でただ一人、朗読を手話に舞う女優です。

「ことば(言葉)」とは、「心を口に繁らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、葉は紡ぐことをいいます。「ことば座」は、この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を朗読と手話を基軸とした舞という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造しています。

ことば座が取り組んでいる朗読舞及び朗読舞劇は、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃をヒントに、語り朗読を手話言語をベースにした舞技で演じるというもので、脚本：演出家の白井啓治が聾女優小林幸枝のために創案した石岡に生まれた新しい舞台表現です。

ことば座は、ギター文化館を発信拠点として
朗読舞「常世の国の恋物語百」に挑戦しています

ギター文化館発 ことば座第18回公演

6月18日～6月20日

「常世の国の恋物語第25話：透明な青の色は龍の流した涙(仮題)」

龍の棲むというこの山に登って来て、この国を見下ろしてみた。

誰にも一度の恋の思い出は持っているものである。

しかし、龍が棲むというこの村上の山の頂上からこの国を見下ろしたとき、何故か思ってしまった。

『この国に、かつて青春はあったのだろうか？ あったのだったらどんな青春だったのだろうか？

本気に恋をした者たちが居たのだろうか？』と。

汚れなき乙女の湧き水を汲む手に一粒の砂金が流れて来てとまった。

それは龍の、乙女が流してくれた涙のお礼。龍の金鱗の欠片だった。

ことば座 〒315-0013 石岡市府中 5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150